

令和 4 年 9 月 3 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00316

研究課題名(和文)1930年前後左翼運動の文化実践におけるジェンダーとセクシュアリティ

研究課題名(英文)Gender and sexuality in cultural activism of leftist movements in the years around 1930

研究代表者

飯田 祐子 (Iida, Yuko)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：80278803

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、左翼文化運動にジェンダーおよびセクシュアリティの力学がいかに組み入れられているか、1930年代のプロレタリア文学を対象として分析した。左翼運動では階級を軸として理論や実践が組み立てられ、研究もまた階級を主要な枠組みとして蓄積されてきた。しかしながら、運動は一枚岩ではなく、内部には中心と周縁があり、中心は周縁との差異化によって生成されている。その構造に注目し、中心と周縁の差異化の際にジェンダーやセクシュアリティの力学が機能していることを論じた。研究成果は、11章で構成された『プロレタリア文学とジェンダー 階級・ナラティブ・インターセクショナルリティ』(青弓社、近刊)として刊行する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、階級という力学と、ジェンダーやセクシュアリティの力学がいかに交差しているかを明らかにした。また階級を重要視する一方で軽視されてきた周縁の問題群や、周縁の担い手であった女性の存在を可視化し、それらの構成的外部としての重要性を指摘した。総じて、左翼文化運動をインターセクショナルリティの観点から分析したものとして、従来の左翼文化運動分析に新たな知見をもたらすものといえる。具体的には、愛情や性、家族やケアに関わって構成されるナラティブの機能を問うており、現在社会の分析にも接続可能である。

研究成果の概要(英文)：In this study, we analyzed how the dynamics of gender and sexuality are incorporated into leftist cultural movements, focusing on proletarian literature in the 1930s. The leftist movement built its theory and practice around class, and class has also been the main analytical framework for its research. However, movements are not monolithic; within them there is a center and a periphery, and the center is generated through differentiation from the periphery. Focusing on this structure, the study clarified that the dynamics of gender and sexuality function in the differentiation between the center and the periphery. The research results will be published as "Proletarian Literature and Gender: Class, Narrative, and Intersectionality" (Seikyusha, forthcoming), which consists of 11 chapters.

研究分野：日本近代文学

キーワード：左翼文化運動 プロレタリア文学 ジェンダー セクシュアリティ 階級 インターセクショナルリティ
女性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

1. 研究開始当初の背景

1930年代の社会運動に関する研究を概観すると二つの波がある。第一波は政治運動が盛んであった1965-75年にある。その後関心が薄まり、90年代には研究数が激減するが、2000年代に入って顕著に研究数が上昇しており、2010年以降を第二波と捉えることができる。日本近代文学研究の領域においても、学会誌で特集が組まれるなど、関心の高まりが確認される(『日本文学』63(11), 2014.11、『昭和文学研究』74, 2017.3)。本研究との関わりから第二波の研究の中で注目しておきたいのは、複数の運動の関係性の指摘や(竹内栄美子「『プロレタリア文学史』を再編するアナキズムとの接合から」、前掲『日本文学』特集)、子どもなど周縁の存在に目を向けた研究が現れていることである(Samuel Perry, *Recasting Red Culture in Proletarian Japan: Childhood, Korea, and the Historical Avant-garde*, University of Hawai'i Press, 2014)。政治理念そのものに関わる求心的な問題設定から、運動の外部との関係や、内部における多様性へ、分析の切り口が広がっている。本研究では、周縁化し検討が遅れてきた情動的側面、とくにジェンダーやセクシュアリティの問題系に焦点を絞る。複数の力学の一つとしてジェンダーを捉える分析は、複合差別の指摘などとして女性を対象にした研究から開始したが、近年は男性性についての研究も深まりつつある(大日方純夫・天野正子・阿部恒久編『男性史』1-3、日本経済評論社、2006/木本喜美子・貴堂嘉之編『ジェンダーと社会：男性史・軍隊・セクシュアリティ』旬報社、2010/Andrea Germer, Vera Mackie, Ulrike Woehr(ed.), *Gender, Nation and State in Modern Japan*, Routledge, 2014)。ナショナリズムや戦争の論理との結合が最も注目を集めてきたが、社会運動についても、同様に、ジェンダーおよびセクシュアリティの観点からの分析が可能かつ必要である。国外では検証が開始され、女性表象や同志愛の生成などについて論じられているが(Angela Coutts, "Imagining Radical Women in Japan: Leftist and Feminist Perspectives", *Signs*, Vol. 37 No 2, pp.325-55, 2012/Heather Bowen-Struyk, "Between Men: Comrade Love in Japanese Proletarian Literature," in *Red Love across the Pacific*, Palgrave Macmillan, 2015)、国内では未検討のみである。性愛および身体は、理念と情動のすり合わせにおいて重要な位置を占めている(ソビエトを対象とした研究に、北井聡子「世界変容・ドグマ・反セックス 一九二〇年代 ソビエトの性愛論争」『現代思想』45-19、2017.10)。以上をふまえて、日本の1930年代社会運動を対象としたジェンダー・セクシュアリティ研究を行う。

2. 研究の目的

本研究の目的は、1930年前後の社会運動を構成する情動的側面に目を向け、文学などの文化実践を対象として、これまで周縁化されてきたジェンダーとセクシュアリティのポリティクスがいかに機能しているかを明らかにすることにある。本研究は、国内における1930年代社会運動のジェンダー・セクシュアリティ研究の端緒を開くものである。学術的独自性と創造性として、以下を挙げる。

- 社会運動における理念と情動の関係性が明らかになる。
- 運動の論理とジェンダーとセクシュアリティのポリティクスとの複合的機能が明らかになる。
- 社会運動における文化実践の動員力と、多様な欲望の生成の様態が明らかになる。
- それにより社会運動の周縁が可視化される。

3. 研究の方法

以下の三つの観点から分析を行う。

①運動の主体形成におけるジェンダー

社会運動の主体の形成に、ジェンダー・ポリティクスがどのように機能しているかを明らかにする。男性性研究では覇権的な男性性が従属的な男性性によって支えられる構造が指摘されている(R.W. Connell, *Masculinities*, University of California Press, 1995.)左翼運動とジェンダーという視点では、従来の研究では、「女性」について検討がなされてきたが、女性性についても同様に複数性を抽出する。

②社会運動組織の生成と階層性とジェンダー化

第一に検証すべきなのは、覇権的な男性性によって組織がホモ・ソーシャルに均質化しているということであるが、一方で組織内の覇権闘争が熾烈に繰り広げられており、組織員の階層化もなされている。均質化と差異化の緊張のなかで形成される階層性を、ジェンダーとセクシュアリティの力学に目を向けることで浮かび上がらせる。

③社会運動のナラティブにおけるジェンダーとセクシュアリティのナラティブの混淆

社会運動の文化実践においては、ジェンダーやセクシュアリティを語るナラティブ(恋愛や性、家族などについての語り)が組み込まれている。それらのナラティブの、運動に未だ参加してい

ない受け手に共感の足場を設け啓発する側面、情動を喚起するレトリックとして再生産されるという側面など、複数の動きを抽出する。加えて、社会運動的なナラティブが量産され消費される側面にも目を向け、資本主義批判のナラティブが、文化商品として出版市場に組み込まれる事態を明らかにする。批評性の希薄化としてだけでなく、文化の動員力として考察を加える。また運動に収斂しきらない多様な欲望の生成が見込まれる。

4. 研究成果

本研究では、左翼文化運動にジェンダーおよびセクシュアリティの力学がいかに組み入れられているのかについて、1930年代のプロレタリア文学を中心に分析を行った。当時の左翼文化運動のなかにおいてプロレタリア文学は最も存在感の大きい領域であり、演劇や美術、映画などの領域と連動しており、プロレタリア文学についての分析は他ジャンルの動向にも十分に敷衍可能だと考えられる。左翼運動では階級を軸として思想や実践が組み立てられ、研究もまた階級を主要な分析の枠組みとして展開してきたが、運動の内部には中心と周縁があり、中心は周縁との差異化によって生成されている。その構造に注目し、中心と周縁の差異化の際にジェンダーやセクシュアリティの力学が機能していることを明らかにした。

①については、運動の主体として、女性のなかでも娼妓に注目して分析を行った。分担者・笹尾佳代は、「プロレタリアとしての娼妓表象と廃娼運動」をテーマとして、一九二〇年代後半、廃娼運動の高揚とともに登場していた娼妓の表象/自己表象をとりあげた。廃娼運動に関わっていた賀川豊彦の「偶像の支配するところ」(『婦人之友』一九二六年四月～一九二七年二月)や、その連載中に遊廓から逃れた森光子の『吉原花魁日記』(一九二六年)『春駒日記』(一九二七年)、松村喬子の「地獄の反逆者たち」(一九二九年)には、娼妓の実態を「労働」と捉える視座や、労働運動家の助力によって「自由廃業」を遂げるまでが共通して描かれている。これらの娼妓表象/自己表象を、運動の周縁に配されていたジェンダー・セクシュアリティと階級の問題系の交差点と捉え、その複合的な構成のあり方と諸問題を検討した。また分担者・中谷いずみは、「残滓としての身体/他者:平林たい子「施療室」にて」というテーマで、分析を行った。主人公が闘士として再生/覚醒する過程における、運動の外部の他者といえる非階級化された娼妓経験者の女性たちなどとの遭遇と連帯への可能性について論じた。性愛や生殖にまつわる経験は、きわめて身体的なものであり、制御不可能であるとともに、運動の論理によって抑圧されたものを回帰させる契機を生み出すことを指摘した。これらの考察を通して、女性性の中の複数性が運動の論理のなかでどのように組み立てられているのかを明らかにするとともに、より他者化された娼妓における運動との接続の契機について検討した。

②と③については、代表者・飯田祐子が、「プロレタリア文学運動における「金」と「救援」のジェンダー・ポリティクス」という視点で、現代日本文学全集第六二集『プロレタリア文学集』(改造社、一九三一年一月)をとりあげ、運動における「金」のジェンダー配置について論じた。円本の嚆矢としてよく知られたブルジョア・ジャーナリズムの象徴であり「文学史」を輪郭づけるこの全集について参加するに際して(第六二集は最終巻)、運動の論理によって用意された理由は「救援」であった。「救援」という論理は、この本を、商品ではなく募金のツールへと変容させるものとして、必要とされたといえる。具体的には、同アンソロジー所収の、林房雄「鉄窓の花」小林多喜二「救援ニュース No.18.附録」、中野重治「新しい女」などをとりあげ、主要発表媒体であった『戦旗』における「救援」の語られ方と合わせて分析を行った。それらの検討を通して指摘したのは、「救援」は、前衛に対する後衛として配置されており、女性ジェンダー化していることである。プロレタリア文学の文脈においてジェンダー化したナラティブはけして排除されてはならず、むしろ内部と外部を構成するナラティブにおいてジェンダーは強く機能してきたことを明らかにした。「救援」は、闘争する身体を活性化させ、また次世代の闘争者を育てる家族の領域であり、左翼運動におけるケア領域ということが出来る。再生産を担うケア領域が、生産中心主義的社会においては周縁化されていることが指摘されているが、左翼運動においても、同様の構造が発生していることを指摘すると同時に、生産領域を成立維持するために不可欠な周縁として、その重要性を指摘した。

以上が主要な研究成果であるが、さらに、研究会参加者5名、代表者が参加したパネル参加者3名の論考を加え、全11論文によって構成された『プロレタリア文学とジェンダー 階級・ナラティブ・インターセクショナルリティ』(青弓社、近刊)を刊行する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 飯田祐子	4. 巻 4
2. 論文標題 文学場における女性作家	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア・ジェンダー文化学研究	6. 最初と最後の頁 11-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯田祐子	4. 巻 69(11)
2. 論文標題 再生産・生殖の再配置に向けて：現代女性作家による五つの実験	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本文学	6. 最初と最後の頁 12-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中谷いずみ	4. 巻 23
2. 論文標題 フェミニズムとアナキズムの出会い 伊藤野枝とエマ・ゴールドマン	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 有島武郎研究	6. 最初と最後の頁 15-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯田祐子	4. 巻 4
2. 論文標題 文学場における女性作家	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア・ジェンダー文化学研究	6. 最初と最後の頁 11-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中谷いずみ	4. 巻 98
2. 論文標題 空白の「文学史」を読む プロレタリア運動にみる性と階級のポリティクス	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本近代文学	6. 最初と最後の頁 132-145,
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 Yuko IIDA
2. 発表標題 Outside Prison: Proletarian Literature and the Family
3. 学会等名 Association for Asian Studies 2021 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 飯田祐子
2. 発表標題 女工と修養雑誌：希望社『泉の花』
3. 学会等名 東アジアと同時代日本語フォーラム (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯田祐子
2. 発表標題 文学場における女性作家
3. 学会等名 国際シンポジウム女性・文学・歴史 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯田祐子
2. 発表標題 「私小説」から遠く離れて：柳美里『8月の果て』とともに
3. 学会等名 韓国日本文学会2019年度秋季学術発表会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中谷いずみ
2. 発表標題 アナキズムと女性解放の論理 伊藤野枝を軸として
3. 学会等名 有島武郎研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 笹尾佳代
2. 発表標題 左翼運動と女性作家 雑誌『女人芸術』にみる運動の周縁
3. 学会等名 奈良女子大学文学部言語文化学科 ジェンダー言語文化プロジェクト講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯田祐子
2. 発表標題 左翼情報の流動性とジェンダー：『女人芸術』と『戦旗』
3. 学会等名 タイ国日本研究国際シンポジウム2018（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 笹尾佳代
2. 発表標題 スキャンダル報道言説への反照 柳原白蓮『荊棘の実』の射程
3. 学会等名 タイ国日本研究国際シンポジウム2018（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯田祐子
2. 発表標題 『女人芸術』と外部
3. 学会等名 東アジアと日本語フォーラム上海大会（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯田祐子
2. 発表標題 メタファーとしての「混血」の身体：佐多稲子「分身」を読む
3. 学会等名 2018年度日本近代文学会東海支部シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 飯田祐子
2. 発表標題 闘う少女 働く少女 in the 1930s
3. 学会等名 国際シンポジウム： 帝国 日本をめぐる少女文化
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 飯田祐子, 中谷いずみ, 笹尾佳代	4. 発行年 2019年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 216
3. 書名 女性と闘争: 雑誌「女人芸術」と一九三〇年前後の文化生産	

1. 著者名 中谷いずみ他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 柏書房	5. 総ページ数 663
3. 書名 赤い鳥事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中谷 いずみ (Nakaya Izumi) (10366544)	二松學舎大學・文学部・准教授 (32664)	
研究分担者	笹尾 佳代 (Sasao Kayo) (60567551)	神戸女学院大学・文学部・准教授 (34510)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------